

第 202 回 谷中霊園の小川源兵衛像と鈴木喜三郎像

筆者：林 久治（記載：2022 年 9 月 28 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいますので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。

武漢肺炎による自粛生活で家に籠っていると、運動不足で体重が増加するし、精神的にも圧迫を感じる。私の銅像探索は不要不急の活動ではなく、私の生存に必要な不可欠である。昨年の末には感染者数が激減し、「これで流行は終息か？」と期待していた。所が、本年になって第 6 波が到来してしまった。2 月 3 日には、日本全国の新規感染者数は、過去最高の 104,334 名に達した。しかし、これをピークとして新規感染者数は徐々に減少して、6 月 23 日には 16,670 名にまで減少した。

この頃、私は第 4 回目の予防接種を予約し、7 月 8 日に受けることが出来た。そこで、私は 7 月 16 日からの連休後に大阪に行って、孫達と遊ぶことを計画した。しかし、6 月末から第 7 波が到来して、新規感染者数が急激に増加し始めた。娘から「今月は、大阪に来るのを見合わせたら」と言われたので、残念ながら私は大阪行きを中止した次第である。その間、新規感染者数は急激に増加し、8 月 3 日には過去最高の 249,789 名にまで達した。これは、当日の世界最高値であった。

東京地方の猛暑は例年以上で、7 月初旬から最高気温は連日 35℃ 以上であった。従って、第 7 波と猛暑のため、私は銅像探索をしばらく自粛していた。しかし、8 月 4 日から 6 日までは大変涼しくなったので、6 日には人出の少ない新国立競技場周辺で秩父宮像などを探索した。次に涼しくなった 8 月 28 日には、宝生能楽堂の銅像を探索した。9 月初旬、私共は大阪に滞在し、有馬温泉の行基像、秀吉像、及びねね像を探索し、大阪府三島地域の銅像を探索した。なお、私の銅像探索記の全ては、[2\) のサイト/f](#) から閲覧出来ます。

東京に帰ってからは台風が多く風雨の強い日が多かったので、銅像探索を控えていた。しかし、彼岸になり天候も安定して涼しくなったので、9 月 25 日に銅像探索を再開した。最近、私は [3\) のサイト/1](#) で小川源兵衛という資産家の銅像が谷中霊園にあることを発見した。本像は [1\) のサイト/](#) に収録されていない。また、本サイトには谷中霊園の鈴木喜三郎像が収録されているが、基本情報が不足していた。そのような次第で、今回は谷中霊園のこれらの銅像を探索することとした。本稿は、その探索記である。本稿では、私の意見などを **青文字** で、資料の内容などを **緑文字** で記載する。

(2) 谷中霊園

谷中霊園の地図を図1に示す。25日はお彼岸の期間で、墓参の方々が多数いた。本園は広大で立派な霊園であった。図1に示すように、本園は都立霊園、寛永寺の霊園、天王寺の霊園があるが、都立の方には区画名があり、墓所を探すのに便利である。一方、天王寺と寛永寺の霊園にはそのような表示がなく、墓所を探すのは簡単ではない。



図1. 谷中霊園の地図、本図は、[4\) のサイト/](#)より借用。

探索当日、私はJR日暮里駅南口から紅葉坂（図1の①）を登って谷中霊園に入った。天王寺の門前（図1の②）を曲がると、本園の中心を通る桜通（図1の赤い矢印）に出る。桜通を進と五重塔跡（図1の③）がある。



図2. 上：ありし日の谷中五重塔、本図は、[5\) のサイト/1](#)より借用。
下：川上音二郎像の台座。

図2上に、ありし日の谷中五重塔の写真を示す。本塔の紹介は、[5\) のサイト/1](#)や[6\) のサイト/1](#)、及び[7\) のサイト/1](#)が優れている。[6\) のサイト/1](#)によれば、本塔の由来は次の通りである。

幸田露伴の小説『五重塔』のモデルとして知られる谷中の五重塔は、天台宗の寺院護国山尊重院天王寺の境内（現在の谷中霊園内）に立っていました。天王寺は、もとは日蓮宗で長耀山感應寺尊重院と称し、道灌山の関小次郎長耀と日蓮とのゆかりによって建立された古刹です。元禄12年（1699）幕命により天台宗に改宗し、その後天保4年（1833）に現在の護国山天王寺と改称しました。

最初の五重塔は、寛永 21 年（正保元年（1644））に建立されましたが、130 年ほど後の明和 9 年（安永元年（1772））目黒行人坂の大火で焼失しました。罹災から 19 年後の寛政 3 年（1791）に再建された五重塔は、震災・戦災をくぐり抜け、長く谷中のランドマークになっていました。『五重塔』のモデルになったのもこの塔ですが、残念ながら昭和 32 年（1957）7 月 6 日、心中による放火により焼失し、現在はその基礎部分のみが残されています。



五重塔跡から桜通を少し行くと、通りの左側に川上音二郎像の台座（図 1 の④地点、甲 2 号 3 側）があった。その写真を図 2 下に示す。音二郎、妻の貞奴、及び本像の紹介は、次のサイトが優れている。

[8\) のサイト/](#) : 1914 年（大正三年）11 月 11 日、谷中天王寺内で音二郎銅像除幕式を行う。

[9\) のサイト/](#) : 銅像は昭和 17 年に、東京府第一号の金属供出となっていない。銅像の台座だけが残っている。裏側には建設時の撰文がある。

[10\) のサイト/m](#) : 碑文は、[山岸荷葉](#)の書。

[11\) のサイト/f](#) : 谷中霊園・著名人墓碑の地図。川上の碑は⑥。

[12\) のサイト/p](#) : 川上像の説明書（現在は無い）。

[13\) のサイト/4](#) : 音二郎像は小倉惣次郎と山田泰雲の共作。

なお、本稿の最後に川上像の建立経緯を紹介する。

図 3. ありし日の川上音二郎像、本図は、[13\) のサイト/4](#) より借用。

（3）寛永寺谷中霊園の小川源兵衛像

[3\) のサイト/1](#) によれば、「小川源兵衛の銅像は寛永寺谷中霊園の徳川慶喜公墓所の近くにある」と書かれていたので、私は先ず慶喜公の墓所を目指した。その周辺の地図を次ページの図 4 上に示す。図 1 の⑤の地点に、「**ふじむらや**」という花店がある。図 4 上では、これを①と記載する。①地点の裏にある墓地入口（図 4 上の②地点）に、「**徳川慶喜墓**」と記載した案内板がある。その写真を図 4 下に示す。

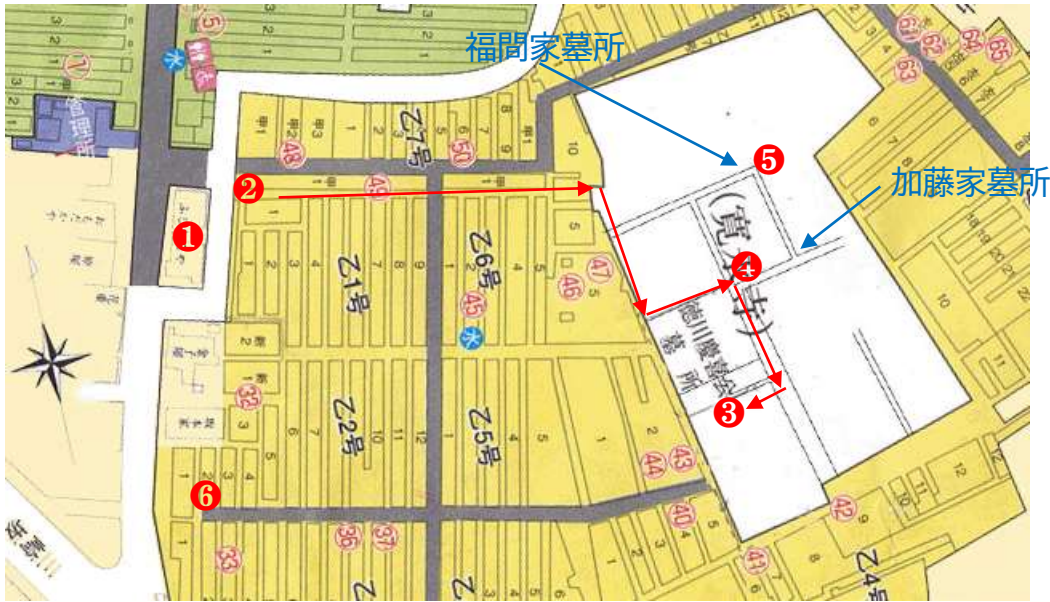


図4. 上：寛永寺谷中霊園の徳川慶喜公墓所の周辺地図、本図は、[14](#) のサイト/mより借用。下：徳川慶喜公墓所への案内板（図4の②地点）。

②の案内板から墓地内の道に入ってしばらく直進すると、角毎に同様の案内板がある。次々と現れる案内板に従って数分歩いて行くと（赤い矢印の道順）、「慶喜墓所」の入口（図4上の③地点）に到着することが出来た。墓所入口の写真を、次ページの図5上に示す。

図4上に示すように、「慶喜公墓所の角」（図4上の④地点）から一般人の墓地に入り、「加藤家墓所」の角を左に曲がると、「福間家墓所」の手前に「小川家墓所」があり、そこに「小川源兵衛像」が2基設置されていた（図4上の⑤地点）。



図5. 上：徳川慶喜公墓所の入口、下：小川家墓所の小川源兵衛之像、向って左側が初代の像で右側が二代の像である。

2基の胸像の写真を図5下に示す。本図において、向って左側の像には「初代小川源兵衛之像」との題字があり、右側の像には「二代小川源兵衛之像」との題字があった。両像ともに、真後ろから晴天の太陽が輝いていたので、全くの逆光条件で、良質の写真を撮影することが出来なかった。



図6. 左：初代小川源兵衛之像、右：本像背面の彫文。

図6左には、初代胸像の近接写真を示す。図6右には、本像背面の彫文を示す。本像の周辺には、背面の彫文以外に、由来を説明する資料は全く無かった。本彫文より、本像に関しては、「**制作者が高名な高村光雲（1852-1934）である**」ことしか分からなかった。流石に、光雲作だけあって、本像の出来栄えは見事である。私の想像では、「原像は戦時供出となり、戦後になって再制作された」のであろう。

次ページの図7左には、二代胸像の近接写真を示す。図7右には、本像背面の彫文を示す。本彫文より「**本像の建立は昭和四十八年十月吉祥であり、制作者は山本稚彦**」であることが分かった。



図7. 左：二代小川源兵衛之像、右：本像背面の彫文。

小川家の墓所は大変立派であったが、民間人のためか小川源兵衛さんに関するネット記事は極めて少ない。私が発見できた有用な記事は、[3\) のサイト/1](#)と[15\) のサイト/7](#)（「人事興信録」データベース、第4版 [大正4(1915)年1月]）くらいであった。[15\) のサイト/7](#)には、小川源兵衛氏の情報が以下のように書かれている。

人事興信録：小川源兵衛

爵位・身分・家柄：東京府平民、職業：資産家、生年月日：嘉永三年七月十四日（1850）、住所：東京、日本橋、橋町二ノ八、

記述部分（略伝）：君は滋賀縣人小川松與門の弟にして嘉永三年七月十四日を以て生れ明治十二年四月分家して一家を創む資産家にして所得税千七百餘圓を納む。

二代像の制作者である山本稚彦の略歴は、[16\) のサイト/4](#)に次のように書かれている。

山本稚彦（わかひこ、1901－1993）は大正-平成時代の彫刻家。

明治34年4月29日生まれ。山本瑞雲（高村光雲の弟子）の子。大正13年帝展初入選。戦後、ソ連のエラブガ抑留中にほった仏像は「エラブガ仏」とよばれ、供養をする会ができた。昭和33年第1回日展で文部大臣賞。日本美術家連盟理事長。平成5年9月20日死去。92歳。東京出身。東京美術学校（現東京芸大）卒。

以上の資料などにより、小川像の概要は次の通りである。

初代と二代小川源兵衛之像

設置場所：台東区谷中7丁目 寛永寺谷中第二霊園

初代小川源兵衛（向かって左側）

制作者：高村光雲、建立時期：不明

設置経緯：初代小川源兵衛（1850-?）は近江出身。日本橋で「近江屋」という店を構えていた織物商の資産家。原像は戦時供出したらしく、本像は戦後の復元と思われる。

二代小川源兵衛（向かって右側）

制作者：山本稚彦（1901－1993）、建立時期：1973年10月

設置経緯：二代小川源兵衛の生年・没年、経歴は不明。本像制作者の山本稚彦（わかひこ、1901－1993）は東京出身、山本瑞雲（高村光雲の弟子）の子。東京美術学校（現・東京芸大）卒。1924年帝展初入選。戦後、ソ連のエラブガ抑留中にほった仏像は「エラブガ仏」とよばれ、供養をする会ができた。1958年第1回日展で文部大臣賞。日本美術家連盟理事長。

（4）鈴木喜三郎像



図8. 左：鈴木喜三郎像、中：台座の彫文、右：本像背面の彫文。

鈴木喜三郎像は [1\) のサイト/](#) に収録されているが、基本情報が不足しているの
で、小川像探索のついでに、本像も探索した。本像は都立谷中霊園にあり区画名が
「乙2号新2側」（図4上の⑥地点）と記載されていたので、探すのは容易であつ
た。図8左に本像の写真を、図8中に台座の彫文を、図8右に本像背面の彫文を示
す。これらにより、本像の制作者、建立時期が分かった。

座主の鈴木喜三郎の経歴もウィキペディアに詳しく記載されている。制作者の本
山白雲（1867-1952）は高村光雲の弟子で、有名な彫刻家である。彼の略歴は [1\) の
サイト/](#) に収録されているが、ウィキペディアに更に詳しく記載されている。本像は
1938年の建立であるが、川上像とは違って戦時供出を免れているようにも見える。
しかし、戦時供出後に戦後に再建されたのかも知れない。この点は不明である。こ
れらの資料などより、本像の概要は次の通りである。

鈴木喜三郎胸像

設置場所：台東区谷中7-3 谷中霊園・乙2号新2側

制作者：本山白雲（1867-1952）

建立時期：1938年5月16日、建立者：全日本司法保護事業関係者一同

設置経緯：鈴木喜三郎（1867-1940）は武蔵国橋樹郡大師河原村（現・川崎市）生まれの司
法官僚、政治家、立憲政友会初代総裁。検事総長、司法大臣、内務大臣を歴任。鳩山和夫
（1856-1911）の長女と結婚したので、鳩山一郎の義兄にあたる。

制作者の本山白雲（1871年10月14日- 1952年2月18日）は、土佐国幡多郡宿毛村
（現・高知県宿毛市）生まれ。1890年7月、宿毛出身の岩村通俊（北海道庁長官、農商務
大臣等を歴任）の援助を得て、東京美術学校（現・東京芸術大学）彫刻本科に入学。在学
中、師の高村光雲の助手として「大楠公像」や「西郷隆盛像」の木型制作に携わった。高
知市桂浜で悠然と太平洋の彼方を望んで立つ坂本龍馬の巨大な銅像（総高約15m）は、白雲
の代表作である。

（5）川上音二郎像の建立経緯

本稿の容量が少し残っているので、[8\) のサイト/](#) に記載されている川上像の建立
経緯を以下に示します。

1911年、音二郎が死亡。1912年7月30日、明治天皇が崩御され、興行中止となる。大喪
が終わると、公演を再開10月、博多公演、引き続き朝鮮巡業に出る。翌1913年1月、す
べてを終えた。かなりの益が出た。そこで、貞奴は音二郎の業績を賞して銅像を建立しよ
うと思いつく。まだ俳優の銅像が創られたことがなかった時代だった。それだからこそ、
音次郎の姿を多くの人の心に留めるために創りたい。困難が予想された。貞奴は、周囲か
ら難しいと言われ、誰もなしていないことをするのが面白いと動き始める。音二郎が、大
好きで、ずっと寄進し、座員の墓所とした泉岳寺で建立したかった。泉岳寺の同意も得
て、思いの外、すんなりと、銅像は出来た。ところが、由緒正しい出身で泉岳寺に葬られ
ている武士らと音次郎は違うと周辺住民が反対した。墓所としてなら良いが、銅像となり
崇め立てられる人物ではないというのだ。同意した泉岳寺も、檀家衆の反対に従わざるを
得ず、申し訳ないと断ってきた。貞奴も簡単には行かないと覚悟していた。泉岳寺での銅
像設立は挫折したが、次に、音二郎らしい盛り場にある公園での建立を考える。東京府公
園課に趣旨を話し銅像設立を願い申し出るが、前例なしと断られる。貞奴は、困難さを思
い知らされるが、踏ん張らなくてはならない。負ける貞奴ではない。一人の力では限界が
あると、支持者・賛同者の協力を頼む。そして、露伴の小説「五重の塔」で知られる谷中

天王寺での設立許可を得た。貞奴の音二郎への永遠の愛の表現が、実現したのだ。1914年11月11日、谷中天王寺内で音二郎銅像除幕式を行う。

参考資料

- 1) のサイト : <https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト : <http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf>
- 3) のサイト : <http://koyama287.livedoor.blog/archives/14817835.html>
- 4) のサイト : <http://www.1483.jp/yanaka/>
- 5) のサイト : <http://yamada.sailog.jp/weblog/2017/01/post-fd92.html>
- 6) のサイト :
<https://www.syougai.metro.tokyo.lg.jp/bunkazai/week/sendagi/sendagi08.html>
- 7) のサイト : <https://www.uenoue.xyz/tennoji-gojunotou/>
- 8) のサイト : <http://www.yomucafe.gentosha-book.com/tensho4/>
- 9) のサイト : <http://zyurokukai-fukuoka.com/hasegawa-03/>
- 10) のサイト : <http://ya-na-ka.sakura.ne.jp/kawakami0tojiro.htm>
- 11) のサイト : <https://www.tokyo-park.or.jp/reien/park/pdf/map073.pdf>
- 12) のサイト : <https://lunaticyuki2.blog.fc2.com/blog-entry-844.html?sp>
- 13) のサイト : <https://twitter.com/chyokokushi/status/1174241172711235584>
- 14) のサイト :
<http://www7b.biglobe.ne.jp/~garamdoh/2-2shushi/sotai/110-0001yanaka/d.htm>
- 15) のサイト : <https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who4-2587>
- 16) のサイト :
<https://kotobank.jp/word/%E5%B1%B1%E6%9C%AC%E7%A8%9A%E5%BD%A6-1118704>